

令和七年度 熊本県立大学 文学部 日本語日本文学科
学校推薦型選抜 小論文 出題意図

本作が災害時の生々しい記録たり得ていることについて、描写の特徴と段落構成との二つの面から分析、説明する能力を問うている。汎用性を持つ緻密な読解力や文章力と、文学部で学ぶ上で必要となる文芸上の表現を鑑賞して言葉にする力の双方の確認を意図するものである。

①

秋の入道雲の下、当たり前前に一日を始めた人々の生活は、杖で体を支えても立っていられない強い揺れにより一転した。汽車の運休が容易に想像されるほどで、石造物の倒壊、何ゆえか口の重い俵屋の態度や警官の緊迫した怒号など、生き残った者達を取り巻く多様な光景が描かれる。さらに家屋の倒壊、余震のなか身内の無事の確認にも難渋する様までが観察的に記される。そこへ伝えられる火災の恐怖。震災前後の光景と人々の振る舞いが時系列に沿って臨場感豊かに描かれているといえる。

百間も身内の心配をし、「恐ろしさが刻刻に増」していたわけだが、その内面には恐れとは別の感情が渦巻いてもいる。錯綜する人間や金銭のしがらみから逃れられるかもしれないという「痛快とでも云ひたい様な気持」である。さらに偶々旅費として手元にあった現金によってある種の全能感を感じていたことも記される。不謹慎極まりないが、被災下における恐怖一辺倒ではない人間の感情の動きを記している点は極めて注目される。

②

最終段落でまず描かれるのは、朝の入道雲とはうってかわって、不気味な雲とも黒煙ともつかぬものが渦巻き、旋風とともに遠雷が響く空の下で、余震におびえ、ただ呆然とする自身の姿である。百間は運良く身体の支障なく生き残り、自身の不謹慎な内面の吐露を含め、地震時の冷静な観察記録を残しうる立場にあった。しかし、震災当日午後の実際状況は、そのような冷静な記述のみで語られるべきではないと、百間は考えたのではなからうか。指導していた女性を含め、遠く眺めていた煙の下で失われた命に思いを致すにつけ、それをその時「知らなかった」ことへの後悔は増す。そのことへの慰めを得るためにも、自身がその時に感じていた本当の恐怖を思い出し、記しておかずにはいられなかったのだろう。